

第36回

「女と男のより良い未来

～わかりあえれば、もっと楽しい

わかちあえれば、もっと嬉しい」(仮題)

「え～っ、その言葉、何……？ わかってるつもりだったこの人(オトコ、オンナ)のことがすっかりわからなくなってきた……」こんな経験ありませんか？「わかりたいのにわからない」が、「わからないしどうしようもない」に変わる前に、いろいろ話してみませんか。ゲストの三輪敦子さんは約2年間の国連女性開発基金(UNIFEM)アジア太平洋地域バンコク事務所に勤務し、プログラム担当官として、アジアのNGOや政府をパートナーとしてUNIFEMが実施する、女性の社会・経済参加をめざした様々なプロジェクトのマネジメントを担当されました。身近なジェンダーの問題を取り上げて、女性も男性もお互いを理解しあえるためのヒントをみなさんとさぐってゆきたいと思います。より良い関係づくりに向けて何が大切か、考えてみましょう。

4月29日(祝) 13:00開会(16:00閉会予定)

【ゲスト】三輪敦子さん(元国連女性開発基金(UNIFEM)職員)

○会 場…應典院本堂ホール

○参加費…会員1,000円(一般1,500円)

○主 催…應典院寺町倶楽部

いのちと出会う会

いのちについて語り合う場として定着した「いのちと出会う会」。2月と3月の予定をお知らせします。

第26回

2月20日(木)

「剛は自転車で
転んで死んだ」

話題提供者

腎性尿崩症友の会 神野啓子さん
腎性尿崩症という稀少難病に対する、情報不足で17歳の我が子を死なせてしまった……。同じ病を持ち、悩む全国の家族と一緒に自助支援の友の会を立ち上げ、歩みを始めたセルフヘルプ活動について語っていただきます。

第27回

3月20日(木)

「釜ヶ崎の人々から
教えられたもの」

話題提供者

大阪建設労働者生活相談員

入佐明美さん

西成釜ヶ崎の労働者の生活相談員として24年。ボランティア、ケースワーカーとして日雇い労働者の心の声を聞き続け、支え、また支えられた日々。今の時代に忘れられつつある大切なものについて、入佐さんの深い体験から学びます。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

エンディングサポートの集い
3月23日に開催!!

應典院掲示板(P7)でもご紹介の通り、大蓮寺・エンディングを考える市民の会が主催する「エンディングサポートの集い」が開催されます。

應典院の本寺・大蓮寺が、昨年来進めてきた「エンディング・サポート・プロジェクト」が、いよいよ本格的に展開されます。多くの方のご参加をお待ちしています。

○日 時…3月23日(日) 13:30～

○場 所…應典院本堂ホール

○入場無料

【新入会員ご紹介】

(2003年2月20日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○一般会員

【滋賀県】

伊藤孝子 滋賀郡志賀町

【京都府】

カール・ベッカー 京都市

【大阪府】

十九川正典 八尾市

○個人会員

【大阪府】

三木康彰 大阪市住之江区

○学生会員

【京都府】

柳沢大伸 相楽郡山崎町

以下の会員の方には、ご寄付をいただきました。ありがとうございました。

・松浦善満 金1万円

・榛木恵子 金1万円

サリュ VOL. 36

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2003年2月20日
(偶数月発行)

編集人 池野亮、大塚郁子

川井田祥子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL06-6771-7641

FAX06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol.

36

サリュ

フランス語で救いの意



「新しい文化の育成は、伝統文化をも活性化することにつながる」と金沢市長は考え、市民の手で運営される金沢市民芸術村は誕生した。

伝統文化が息づく町も、つねに新しい風を送り込まねばならないのだろう。新旧入り混じり、さまざまな表現が共存するところに豊かな文化ははぐくまれる。創造的な作業を見つめ続けること。そして、自らが表現者となること。芸術に向ける関心を一人ひとりの立場から深め、新しい風となることがアートマネジメントの原点なのかも知れない。

2003. February

「クリエイティブ・コミュニティ」となり得るか まちづくりから考える、新しい生き方の選択

應典院は、都市を創造的に高める

関西低迷の中、この4月、大阪市立大学の社会人大学院、創造都市研究科がスタート、新しい都市づくりに向けて、場のあり方、人のあり方を問う試みがはじまります。併行して若い世代による独自のまちづくりも活発化しており、これまでとは違う、クリエイティブな大阪が垣間見えます。人が創造的でなければ、まちも創造的ではあり得ない。大学、まちづくり、NPOで活躍する3人のゲストが、創造都市について語り合います。

創造都市は個性あるまち

——佐々木先生は長くイタリアに留学されていたそうですが、イタリアと大阪の共通点はありますか。

佐々木●大阪は「このままではナポリになる」との説があります。私は「それはナポリには失礼だろう」といっているのですが(笑)。ナポリという町は、非常に魅力的な町なんです。美男美女が多いし、ファッションでも群を抜いてセンスがいいが、しかし、一方で経済の方は、世界のグローバル・スタンダード(*1)から明らかに置いてきぼりをくらっている。こんな町、そうないですよ。けれども、こうした「思いつきり个性的なまち」というのもあっていいと私は思うんです。現在、再評価されている哲学者にピーコという人がいますが、彼はデカルト的にひとつの原理で世界を覆うような、今風にいえばグローバル・スタンダード論に

異を唱えています。これを彼は「トピカ、地域個性に基づくナポリ的な世界観」と名付けましたが、わかりやすくいうと、いままでのアメリカ追従型でなければ世界に通用しない、という観念を捨てて、もっと地域固有の個性や伝統を重んじようというわけです。

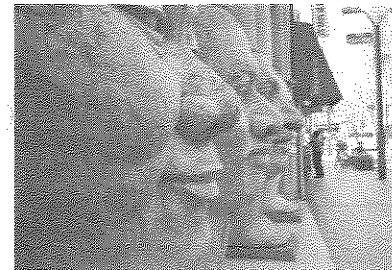
そういう意味でいうと、大阪がナポリ的になるのは、私は大賛成なんです。私は「創造都市」を提唱していますが、それにはニューヨークや東京のような世界都市からの脱却と人間的なスケールによる都市づくりが必要です。大阪はその可能性を大きく秘めています。これが、この春から、大阪市立大学の社会人大学院で教鞭をとることになった最大の動機でもあるわけですね。

早川●私の仕事はまちづくりのコンサルティングで、行政や企業が地域と関わる際のお手伝いをさせていただいています。

「創造都市は個性のある町」とのこと、

まちづくりの世界でまず感じたのは、ほんとうに大阪は個性的な人が多いということです。とくに所属先や肩書きにこだわらず、個人の名前と力量だけで行動している人が多い。そういう意味でいうと、まさしく「職人」の世界だと思います。

私も最近なんとか独立できたんです



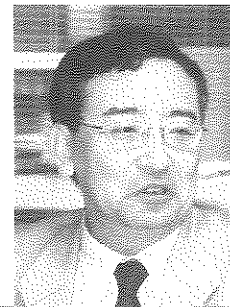
が、それをおもしろがってくださったのが應典院の秋田さんでした。いうまでもなく、個性的で創造的な人ですよ(笑)。そして、去年の夏に秋田さんと一緒にまちづくりの活動をはじめ、NPO組織「(仮称)上町台地のまちづくりを考える会」の設立準備中です。

——上町台地は、大阪を代表する文化ゾーンですね。

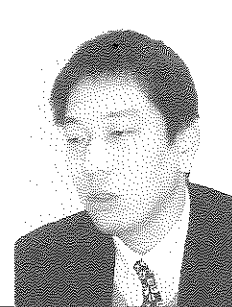
早川●はい。その上町台地の魅力をもっと探し出して、都心の魅力を上げていこうというのが「考える会」の趣旨です。應典院や寺町はもちろん、最近では鶴橋のリアタウンや空堀の町屋再生などでも、都心の新しい文化が芽吹いています。そうした芽をひとつの場所に留めておくのはもったいない。そこで、みんなが出会い、ネットワークを形成していく機会や機能をつくろう。また、地元の住民や外から来た人、たとえば大学生やボランティアを受け入れることのできる場にもしていこうと考えています。

——北川さんもまちづくりのNPOスタッフとしてご活躍ですね。

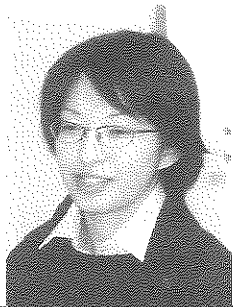
北川●はい。去年の4月からNPO政策研究所の事務局スタッフとして働いています。大学では文化財、とくに景観保全・まちなみ保存の研究をしていましたので、ぜひま



佐々木雅幸さん



早川厚志さん



北川真理子さん

ちづくりに関わりたいと念願していました。そこで、應典院でも実施されていますが、大学コンソーシアム京都のインターンシップに応募して、5ヶ月間の現場参加をさせていただきました。実際参加してみてわかったのですが、早川さんのお話同様、この世界で働いておられる方というのは、ほんと個性的なんですね。濃い、元気、そして不思議(笑)。そこがいちばんの魅力です。

インターンとしてプロジェクトに関わっているうちに、NPO政策研究所に正職員として従事することになったわけですが、自分の興味・関心を大切にしながら、それを活かせる仕事を選べたことは、ほんとうに幸運でした。

早川●いままでの就職ルートは違う、新しいスタイルですね。

民学協同で、学びの地域化を

——今度の大学院は、創造都市研究科と銘打っていますね。

佐々木●大阪というところはもともと、先ほど早川さんが指摘されたように、「商人」と「職人」のまちでした。京都のような権威型・階層型社会とは違う。完全にイタリア型の職人社会なんです。「原大阪」というのは自由で創造的な都市であり、これに回帰しなくてはならない。現代は、これまでの大量生産や機能性だけでモノが売れない時代です。そうであれば、この職人が生み出す個性あふれる財・サービス、言い換えると、大量生産の先にあるものへの転換こそが、これからの日本が生き残るべき道だと

◇ご出席のみなさん◇

★佐々木雅幸(ささき・まさゆき)さん
立命館大学政策科学部教授。4月から大阪市立大学大学院・創造都市研究科の専任教授に就任。
著書に『創造都市への挑戦』『創造都市の経済学』他。自身もNPOのトップを務める、創造都市推進のリーダー。

★早川厚志(はやかわ・あつし)さん
まちづくりプランナー。都市計画コンサルティング会社を経て、2002年春に独立し「まちづくり工房」を設立。「上町台地のまちづくりを考える会」の事務局長も務める。育児休暇取得経験もある。

★北川真理子(きたがわ・まりこ)さん
京都造形芸術大学大学院・地域デザイン分野にてまちづくり政策を専攻。大学コンソーシアム京都のインターンシップで参加したNPO政策研究所に、4月より事務局スタッフとして勤務。

私は考えています。

事実、安価な商品で一世を風靡したユニクロの商品は売れなくなり、逆に個性を出した高価格のおにぎりが売れている。これからは商品の文化的価値というものを評価していく時代になります。そういう意味からも、その担い手となる人材を育てるインフラ(*2)が必要になってくるわけです。しかも、それを職人気質の都市である大阪で。ですから、今度の創造都市研究科も人材養成のインフラといっているのかも知れ

ません。

——社会人のみが対象の大学院ですね。
佐々木●本来、学びの社会的要請のあるところに、大学は生まれます。これは、大学の起源であるイタリアのボローニャ(*3)を見てもわかることです。

大阪は京都と違って、まず30代から50代の社会人が圧倒的に多い。しかし、ルーチン・ワークに追われ、創造性に欠ける。こうした日常的な課題を抱えた人々を対象にして、創造的に問題解決に挑む大学院が、都心のど真ん中にある、という意義は大きいといえます。極端な話、こうした要請に応えるだけなら、カフェのようにテーブルと椅子だけあればいい(笑)。哲学カフェのイメージですね。また、それがその時代の要請に応じてどんどん変わってもいい。時代と社会に敏感な大学院でありたいと思っています。

——「考える会」でも、いろんな大学との連携も計画されているんですか。

早川●大学はどこも外に開こうとしていますが、その時流を受けて、まち全体で大学の研究者や学生を受け入れる器を設けようとも思っています。また、ただ受け皿だけではなくて、興味はあるけどハウソーがわからない学生さんもここに結集し、発言できる場づくりをめざしています。一方でまちづくりの「職人たち」も、大学の研究にふれ、自らも教えるということも大事なことです。

この上町台地を舞台に、大学と地域がそれぞれ交流しながら、互いに個性を発揮し、また学び合えるような仕掛けを築く意味は

大きいと思います。産学協働にも就いていえば、「民学協働」ですね。

——北川さんはまちづくりに対して、どんな目標がありますか。

北川●いま、NPO政策研究所では「サステイナブル(*4)・コミュニティづくり」を推進していますが、現在はこの担い手育成のための事業に関わっています。まちづくりが、「人生経験や社会経験だけがものをいう」ようでは、今後広がらないと思うんですね。これまでのまちづくりの活動で蓄積されたノウハウを、ひとつの社会的スキルとして提供するような、そういう機構と場や気運づくりをめざし、広く参加を求めています。

私個人としては、京都造形芸大で勉強してきましたから、最近では、まちづくりとアーティストとの関係の支援をする、そんな役割を担っていければ、と思っています。

NPOは新しい生き方の選択肢

佐々木●もともとアートは語源的には、芸術と工芸、つまり技能とか技という二重の意味がありました。職人が作り出す工芸は、生活に役立ちながら、美しさも併せ持つものでなくてはならない。単に機能性重視ではないですね。これからは、こうしたアートと経済とが調和していく時代にならなくてはなりません。

しかし、現段階ではこの二者は、相反するもののようには考えられています。そこで、

「アートマネジメント」の概念がとて大切になってくるわけです。つまり、一方で若いアーティストの育成と創造する場を提供しながら、他方で「工芸製品などの高いものの価値がわかる、違いのわかる消費者マーケット」というものを醸成していく。そして、そこには、いままですたハコモノを作るために投じてきた公的資金

を活用していく。文化経済の価値を作り上げていくわけです。とにかくにもクリエイティブな場と文化消費の場の創造なしには、今、日本の先行きは拓かれない時代だと思います。

早川●そういえば、ノーベル賞受賞者の田中耕一さんも、いままでの受賞者とは一味違う、職人気質の人ですね。こうした人材を今後も輩出するには、地域や家庭がもう一度教育力を持たなくてはならないと思います。学校教育に頼るだけでは、この道一筋の職人的な価値は育まれませんから。そこで、「考える会」でも市民をはじめとする多様なセクターの参画と協働により、新しい地域教育を築き、「職人」のインキュベーター(*5)的な役割を果たしていきたいですね。

それと、私が好きなのは、関西人の「おもしろがる精神」。おもしろいか、おもしろくないかで価値を判断する気質って、特有のものですよね。とことんおもしろさを追求することで、これからの経済や教育を変えることができるかも知れない。

北川●お堅い行政も、最近目だって変化してきました。いままでの前例踏襲型から、新しいものへ挑戦しようと高まってきたのは、行政の方にも危機意識があるからでしょう。最近では、たとえお金にならない市民活動でも、新しくおもしろければ協力しよう、という気運が確実に見られます。大胆に言えば、NPOと行政が互いを補いながら協働をはじめた、ということかも知れません。いままですた考えられなかったことです。

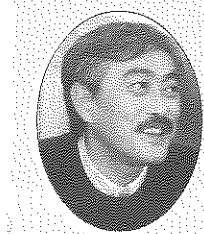
ですから、「人と違うことをしたいんだけど、何からはじめたらいいのかわからない」という大学生や若者にも、NPOなどのインターンを経験しながら、非営利だけど創造的なもの、ほんとうのあるべき社会、というものを垣間見てほしいですね。

佐々木●そうですね。NPOで働くということは、たくさんお金は入ってこないかも知れないけれども、組織に縛られない、そしてこれからの社会を変えてゆく、新しい選択肢なんです。現代は、いままでの社会保障が成り立たない、非常にリスクの高い時代を我々は生きているわけですが、そういうとき

だからこそ、本当にクリエイティブな生き方の価値を高めていってほしいと思います。北川●でも、私たちの世代は最初からすべてが自己選択、自己責任による時代ですから、親の世代が背負っていたようなリスクは、もともとないのかも知れません(笑)。早川●なるほど。「考える会」の役割も、まさにその人自身が自分で選択できる場や機会を設けていくことなんだろうね。お金や偏差値にしか価値を見いだせない人が



M a k e U p C o m m u n i t y



(愛称: いーねっと)

した。

東京ドーム2つつ分(約9万7千㎡)の敷地をもつ芸術村は、紡績工場を再利用した施設で、ドラマ工房・ミュージック工房・アート工房という3つの工房をメインに構成されています。年間利用者のべ約20万人。人口約46万人の金沢市にこれだけの施設ができたのは市長の英断で、各工房の運営は、お金の決裁権も含めてディレクターに任せられました。やりがいを感じた反面、「失敗はできないぞ」と身の引き締まる思いでした。

事業の企画運営、工房管理、利用者調

多し中、クリエイティブな生き方や、個性やおもしろさといった価値観、職人気質などを大切にしながら、ネットワークを築いていきたいと思っています。佐々木●そういう意味では、都市のつながりの場として、應典院の存在は貴重ですね。かつてロマン・ロラン(*6)が、劇場とは“広

- (※1) グローバル・スタンダード……特定の国や地域、企業などだけで適用されている基準ではなく、世界中どこでも適用される基準や規格、ルールのこと。
- (※2) インフラ……インフラストラクチャーの略。「下部構造」「社会的生産基盤」などの意。
- (※3) ボローニャ……イタリアのエミリア・ロマーナ州にある都市。歴史的市街地の保存と再生の取り組みの先駆として有名。ボローニャのボローニャ大学は創立1088年、世界最古の大学とされ、中世イタリアにおいて、この街は学問の都であった。その背景は、交通の要衝であったからだといわれ、志を同じくする学生や教員が自然発生的に各地から集まり、共同で教学組織を運営するようになり、大学へと発展した。
- (※4) サステイナブル……「持続可能な」。1992年の地球環境サミットで、「サステイナブル・デヴェロップメント(持続可能な発展)」という概念を提言したことがきっかけとなり、主に環境と経済の両立をめざす概念として広く使われるようになった。
- (※5) インキュベーター……孵卵器。その意味から、卵にあたる人材や企業を孵化、つまり支援・育成することによって、新しいビジネスを生み出し、地域経済の活性化に貢献する役割を持った機関のことをいう。
- (※6) ロマン・ロラン(Romain Rolland, 1866-1944)……フランス生まれ。多くの芸術作品(小説、戯曲、政治的・社会的論文、研究書)を生み出した。1915年度ノーベル文学賞受賞。文学・哲学・歴史・音楽いずれにも造詣が深く、いまなお多くの人々に影響を与え続けている。

——コミュニティな人々 青海康男さん

とを優先するのではなく、人との関係をどうパブリックなものにつなげていくかが大切だ、とね。

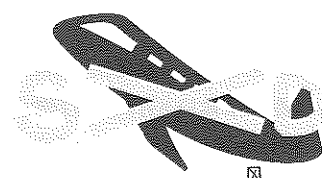
仕事をしていく過程で、「施設の目的をはっきりさせないと方向性は定まらない」という問題意識が芽生え、ディレクターの役割も明確になっていったわけですが、いまの考えをなんらかの形にまとめたといえます。

こう思うようになったのも、いーねっとで若いスタッフと接するようになってから。視点を交えたり価値観の違う人々と関わることは、いーねっとのめざす「開かれた市民社会実現」のための大切な要素です。演劇やNPO活動など、多面的な展開は有効でしょう。コモンズフェスタのような事業はとても参考になります。これからも情報交換しながら、お互いに活動を充実させていきましょう。

SPACE RAMA 2003



加劇団紹介



7月から開催される舞台芸術祭。公演日程も決まり、広報手段や協力体制について話し合うなど、準備を進めています。参加劇団からのメッセージを今号と次号に分けてご紹介します。

千年枕 (7/14~16公演予定)

PRはいつも苦手です。「これが得意で、こういう作品で、誰にも負けません!」てなことを言ってみたい気もするのですが、何事にも「上には上がいる」もの。しいて言うなら、「いつも自分らしさを追求して作品創りをしている」ってところでしょうか? で、どんなのが自分らしいのかというと、毎回それを探索しながら創っているんで、早い話ができるまでわからないのです。でも、それじゃあ観にきていただくのに、あまりにも何もないので、「肩が凝らない。清々しい。ちょっとほろ苦い」の3つの感覚はお約束させていただきます。幸い、いままでのお客様で、この宣伝に裏切られたと思った人はいなかったようです。

自分ではおもしろいと思います。「上には上がいる」と、他人から思われればシメタモノ。深く考えないでお気軽に来ていただきたいですね。千年枕のお芝居は、身近な娯楽なのだから。

PRはいつも苦手です。

「これが得意で、こういう作品で、誰にも負けません!」てなことを言ってみたい気もするのですが、何事にも「上には上がいる」もの。



劇団鹿殺し (7/28~30公演予定)

2000年1月、髭の子チョピンと丸尾丸一郎の呼びかけにより、関西学院大学と神戸大学からメンバーが集まり旗揚げ。旗揚げ初期には、つかこうへい氏の作品を上演。半年間の活動休止後、オリジナル作品で活動再開。戦争・革命・殺人などを題材に、人間のネガティブな感情の爆発を表現してきた。

ロックバンドによる生演奏など、土臭さ、熱さ、男気が「ガツンと殴ってギョッと抱きしめる」独特の世界を展開している。また、半裸の男たちによるセルフアンコール等、劇場に入った瞬間から出ていくまで徹底的に楽しませる演出。

神戸・大阪を中心に精力的に活動を展開。2003年3月には、神戸アートビレッジセンター主催のチャレンジシアターに参加。劇場を戦犯の公開処刑場に見立てた「さよなら〜君が代ラウドネス」を上演予定。梅田rise-1(ライズワン)シアターでも同作品を上演予定。

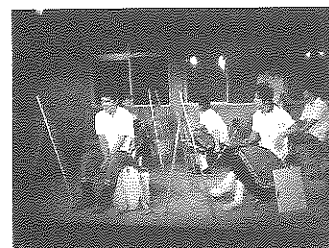


しかばんび (8/4~6公演予定)

いつのまにか人の心の痛みに触れている、それがしかばんびの世界です。『現代寓話』とも言える架空の世界を舞台に繰り広げる物語は、恋愛やコモンセンスといった現代人の抱えるあらゆる問題が底辺にあり、やさしく、ときに痛烈に人の心の痛点を刺激します。革新的でも批判的でもなく、ただ物語を紡いでいく、そうして観終わった後も観客の心に何かを残す、それが『しかワールド』なのです。

しかばんびは今年で結成3年目を迎える若い劇団ですが、作・演出の大橋学は学生時代、関西の大学演劇祭のひとつ、CAMPUS CUP(キャンパスカップ)に出場した実力の持ち主で、そのひと癖もふた癖もある戯曲と、2枚目の役も3枚目の役も自在にこなす個性ゆたかな役者陣とで、『しかワールド』へと鮮やかに観客を引き込んでいきます。

2003年のしかばんびのテーマは「世代は死を内包する」。死ですら人生の選択肢にしている現代人をリアルに描きます。もちろん、しかばんび的に。



今号の座談会でもふれていますが、最近のキーワードは「創造都市」。芸術だけでなく、生き方や経済までも包み込んだ、新しい概念として注目されます。

その定義は別の機会に譲るとして、興味深いのは、長期低迷の大阪で「創造都市」が取り上げられたことです。もっとも創造的なさそうな都市で、あえて創造を問う、という志がじつにユニーク。逆にいうと、私たちは無限に広がる創造という言葉、案外限定つきで縛り付けていたのではないか、という反省があります。例えば地域とか、家族とか、学校とか、規範的なイメージが伴いがちな共同体を、新しい創造の切り口で解釈してみる。父親とか教師とか、堅いキャラクターをもっとアーティストティックに検証してみる。意外な発見があるかもしれません。

とりたてて傑出した才能が必要なわけではありません。地域、人、文化などの資源性が問われるいま、当たり前視してきたものを、もう一度、やわらかな視線で見つめ直すことから始めたいものです。

■今年のスタッフ研修は、いざ金沢へ

恒例のスタッフ研修は、去る1月17日、地方文化都市のモデルといわれる金沢を訪問、公設民営の金沢市民芸術村や学生運営の香林坊ハーバー、初の民間発のNPOセンター、いしかわ市民活動ネットワークセンター(通称:いねっと)などを見学しました。

ご当地のナビゲーターを、いねっとの青海康男さんをお願いし、それぞれの施設や運営ノウハウをじっくり聞きながら、充実した研修となりました。

翌日18日には、福井の名刹・永平寺をお参り、ちょうど修行中の雲水・来馬司龍君に面会しました。昨年の應典院インターンの来馬君、一段と禅僧らしく、みとれてしまいました。

■仏教とスピリチュアルケアを考える

看取りの観点から仏教に注目が集まっていますが、ケアの多様化とともにスピリチュアルケアにも期待が高まっています。しかし、その定義や実践になると一定でなく、しかも医療者・看護者と仏教者の間にも溝があります。

去る1月16日、仏教とスピリチュアルケアについて、飛騨の千光寺・大下大圓さんと佛教大学の村岡潔助教授の公開対談が大蓮寺で開催されました。両者に加え、集まったフロアにも、多士済々の顔ぶれが集まり、この問題に対する関心の深さが分りました。

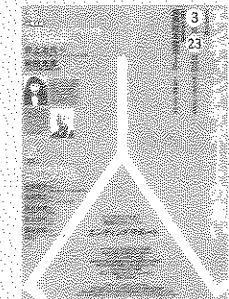
まだまだ今後の議論に委ねるところですが、立場の違う人どうしが出会えたことは大きな収穫でした。対談の様子は、5月頃に刊行の「教化リサーチ」で再録の予定です。

エンディングセミナーいよいよ開始

今号同封のチラシにあるように、来る3月23日、エンディングサポートの集いが開催、続いてエンディングセミナーが連続して開かれます。これは、自分らしい人生の完成期を実現するための学びの場で、このたび発足した大蓮寺・エンディングを考える市民の会が主催するもの。昨年来、生前個人墓「自然」にリンクして、死後の自己決定をテーマに準備されてきました。

23日には、ノンフィクション作家の井上治代さんらエンディングサポートに関わる5団体の代表が一堂に会するほか、4月には「葬送」、5月には「税務・相続」をテーマにNPOの専門家がわかりやすく講座を行います。大蓮寺は言うまでもなく、應典院の本寺にあたりますが、お寺とNPOとのネットワークをもっとも仏教らしい「死後」に結んだことが画期的といえましょう。

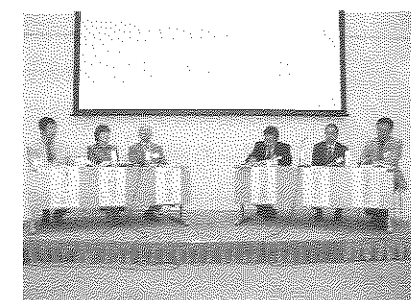
23日はどなたでも参加できますので(入場無料)、ふるってお申し込みいただければ幸いです。



秋田住職発

應典院 掲示板

■関西元気宣言! まちづくりシンポ



應典院を起点に、いままちづくりへの関心や参加が急速に高まっていますが、去る2月1日、アルバック都市計画研究所の主催によるシンポ「関西を元気にするまちづくり」が開催、シンポジストのひとりとして私も参加しました。1部では、CS神戸の中村順子理事長、京都市パートナーシップ推進室の高畑重勝課長補佐、そして私の3人が実践報告、それを受けて立命館大学の佐々木雅幸先生らが入って、シンポとなりました。

会場は100名を越える参加があり、市民・行政・専門家の協働について、突っ込んだ意見交換がありました。應典院の活動に加え、動き始めた「上町台地のまちづくりを考える会」にも注目が集まりました。

■信州・善光寺の参拝旅行

少し先ですが、来る5月11日(日)・12日(月)の1泊2日、大蓮寺・應典院合同の「信州・善光寺参拝旅行」が実施されます。

浄土宗の大本山でもある善光寺は、日本を代表する名刹ですが、今年7年ぶりに前立本尊が公開、復元ともバス、大町温泉に逗留のプランです。往路途中で、有名な松本の神宮寺もお参りさせていただきます。参加費は33000円(1泊4食)。4月20日までに大蓮寺までお申し込みください。